

鳥取大学所蔵の考古資料（1）  
— 古墳時代の遺物：須恵器 —

高田 健一

Archaeological Collections of Tottori University (1)  
: Artifacts of *Kofun* period : *Sue* pottery

TAKATA Kenichi

地域学論集（鳥取大学地域学部紀要） 第15巻 第3号 抜刷

REGIONAL STUDIES (TOTTORI UNIVERSITY JOURNAL OF THE FACULTY OF REGIONAL SCIENCES) Vol.15 / No.2

平成31年 3月 31日発行 March 31, 2019

# 鳥取大学所蔵の考古資料（1）

— 古墳時代の遺物：須恵器 —

高田健一\*

Archaeological Collections of Tottori University (1)

— Artifacts of *Kofun* period : *Sue* pottery —

TAKATA Ken-ichi\*

キーワード：学校所在考古資料，古墳時代，須恵器

Key Words : Archaeological collections in School, *Kofun* period, *Sue* pottery

## I. はじめに

鳥取大学地域学部は、1966（昭和41）年の教育学部、1949（昭和24）年の学芸学部、戦前の鳥取県師範学校等にその源流があり、それらの前身組織から有形、無形の資産を引き継いでいる。小稿で紹介しようとする考古資料は、その一つである。

鳥取県師範学校時代には郷土研究施設があり、米子市淀江町上淀麿寺跡、琴浦町斎尾麿寺跡、倉吉市大日寺経塚など、全国的にも有名な史跡やそれに匹敵する遺跡からの出土品が寄贈されている。また、学芸学部時代には、歴史学研究会に所属する学生らが盛んに地域の遺跡の発掘調査を手がけており、多数の出土品を所蔵している。教育学部時代でも地理系、歴史系の教員が遺跡に関わることが多く、1970～80年代にかけて調査・収集された考古資料もある。

寄贈年代が判明する最古のものは明治20年代であるから、100年以上にわたって蓄積されてきた資料群と言える。これらは、現在の湖山地区へのキャンパス統合移転の際（1966年）に散逸の危機があったものの、教職員、学生、卒業生らによって守られ、現代まで引き継がれてきた。2005年4月以降は、考古学担当教員として筆者が管理している。

これらの本学が所蔵する考古資料は、数100点のオーダーで存在するが、ごく一部を除いて目録が整備されていない<sup>1)</sup>。1950年代に本学学生が調査した古墳出土資料については、その当時の報告はあるものの<sup>2)</sup>、わずかな事例を除くと、半世紀以上も資料に関する知見がアップデートされておらず、残念ながら、地域の考古学研究に寄与する状況になっていない。上述したように、寄贈資料の中には史跡級の

遺跡から出土したものがあり、学史的に意義深いものも存在する。これらが本学に託された経緯に思いを致す時、適切に資料化し、意義付け、公開と保存を図っていくことは、ただ筆者のみならず、本学に課せられた責務と思える。収蔵資料の全てを一度に報告することは不可能なので、準備が整ったものから順次資料紹介を行ない、将来の活用に備えたい。

## II. 資料の概要

小稿では、主として県東部の古墳や横穴墓から出土した須恵器を取り上げる。断片的で一括性の低い採集品が多いものの、これまでにほとんど調査されたことがない遺跡出土のものや、既往の資料を補って、遺跡の時期を窺う手がかりとなるものがある。

なお、横穴墓出土品と考えられる遺物の中には、7世紀後半段階にまで降るものもあり、厳密に言えば古墳時代の範囲から外れるものを含んでいる。

### 1. 岩美町坂上古墳群出土

「岩美郡本庄村字坂上」出土の須恵器が2点ある。蓋と坏身であるが、セットになるものではない。蓋は2片に割れたものを接合しているが、なお欠損がある。坏身は4片が接合されている。

両者には墨書があり、蓋は天井部外面に「発掘地 岩美郡本庄村字坂上 発掘年月 昭和三年七月十五日」とあり、坏身は底部外面にほぼ同じ文面の「発掘地 岩美郡本庄村字坂上 発掘年月 昭和三年七月十五日」を記すが、日付の横に「橋本寄贈」とある。筆致からして、同一人物が同一時期に書いたものと考えられ、出土した遺跡において共伴したかどうかは定か

\*鳥取大学地域学部地域学科

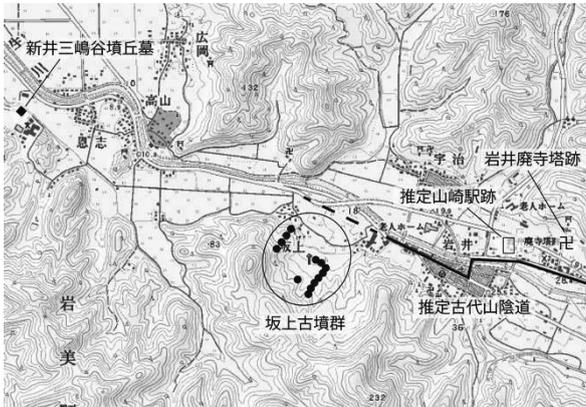


図1 坂上古墳群の位置

でないが、少なくとも寄贈された時点では一緒に存在したであろう<sup>3)</sup>。

「岩美郡本庄村字坂上」は現在の岩美町恩志と岩井の境界付近にあたる。鳥取県の遺跡地図・県内遺跡データベースによると、13基の円墳からなる坂上古墳群（遺跡番号：岩美町 1-0150～0162）が存在している（図1）。このうち2号墳と3号墳は径14.5mの小円墳であるが、1976（昭和41）年の分布調査の所見として破壊された横穴式石室が露出していることが記されている。これは、1924（大正13）年に梅原末治が言及している横穴式石室墳の可能性が高い（梅原1924, p.129）。特定するだけの情報はないが、出土年を考慮すると、これらの須恵器が2号墳ないし、3号墳のものである可能性は高い。

蓋は、径11.0cm、高さ3.5cmを測る（図6-1、図7-1, 2）。天井部の約1/3の範囲に反時計回りのヘラケズリを施し、口縁端部は段を設けて丁寧にする。

一方、坏身は径12.0cm、高さ3.9cmを測る（図6-2、図7-3）。口縁の立ち上がりは低く、端部は薄く尖る。底部の回転ヘラケズリ（反時計回り）の範囲は全体の1/2以下で、粗い。これらの特徴から、TK43～TK209型式段階に降ると考えられ、6世紀後半～末に位置付けられよう。

## 2. 鳥取市国府町西浦山古墳群出土

「西浦山1」あるいは「西浦山」の注記をもつ須恵器が2点ある。これらは、鳥取市国府町美歎の西浦山古墳群（遺跡番号：旧国府町 1-0149、図2）の出土品と考えられる。

1点は透かしのない低脚の高坏で、坏部が大きく破損している（図6-4、図7-4）。もう1点は坏蓋である（図6-3、図7-5）。注記の方法がそれぞれ異なり、高坏は脚部内面の紙片に「西浦山1」と書かれ、その紙片の下にも墨書による同じ注記がある。一方、



図2 西浦山古墳群の位置

坏蓋の方は、ペイントマーカー状のやや太い筆記具によると思われる「西浦山」の文字が内面に記されている。天井部には別の筆致・筆記具による「W8」の注記がある<sup>4)</sup>。

西浦山古墳群は、1964（昭和39）年に公園造成に伴って複数の円墳が破壊され、筒形銅器や鉄鏃などが出土したことでよく知られている。鳥取県立博物館に収蔵された遺物群の整理と再評価を行なった東方仁史によると、1956（昭和31）年8月出土の須恵器と1964（昭和39）年3月出土の金属製品の2者が存在する。後者に属する筒形銅器、鉄鏃などは、古墳時代中期前葉の古墳の存在を裏付けるが、その他に出土した須恵器や鉄器を見ると、中期中葉以降も継続した古墳の築造を考へるといふ（東方2006）。

一方、公園造成に先立つ1956（昭和31）年9月に、西浦山1号墳として、鳥取大学歴史学教室の学生によって調査された箱式石棺があり、棺外から須恵器高坏2点、棺内から鉄鏃、刀子、小玉のほか、人骨が発見された（大村1956）。小稿で紹介する須恵器高坏は、この棺外から出土した須恵器高坏2点のうち「A」と名付けられたものである可能性が高い。底部径は11.0cm、高さ8.8cmである。もう1点の須恵器高坏「B」（図6-5）は、現状の保管品の中にはないが、口径14.5cmになる有蓋高坏であり、高坏「A」はこれと類似した形態、法量と考えられる。時期比定は難しいが、口径の大きさや底部外面に回転ヘラケズリがほとんど施されていない点を考慮すると、TK43～TK209型式段階と考えられる。

なお、須恵器以外にも鉄鏃や刀子などの鉄器も報告されているが、残念ながらそれと確認できる資料は見あたらない。

坏蓋は、口径13.0cm、高さ4.0cmで、天井部がほぼ平らな面をなす。ケズリ調整はその平らな面の縁辺部を擦る程度に形骸化している。口縁端部には段



図3 生山古墳群の位置

を作り出してその点に限っては古い要素を残すと言えるが、全体のプロポーシオンや天井部のケズリの範囲が極めて狭く、形骸化している点からすると、TK43～TK209 型式段階と考えられる。

### 3. 鳥取市生山古墳群出土

鳥取市生山古墳群は、鳥取市津ノ井の丘陵上に広く展開する古墳群の一部である（遺跡番号：旧鳥取市 4-0817～0891, 図3）。古墳群の南半部は津ノ井ニュータウン造成工事に伴って発掘調査されている。残念ながら、正式な発掘調査報告書が刊行されていないが、公表された資料などによると、古墳時代前期後半から中期にかけての古墳群である。生山古墳群として括られる範囲では、むしろ未調査の北半部に多数の円墳が存在している。

遺物は、須恵器坏身1点、坏蓋片2点、短頸壺1点がある（図6-6～8, 図7-6）。坏蓋片2点は接合しないが、大きさ、細部の特徴、色調からみて同一個体の可能性が高い。いずれも裏面や内面に赤いペイントマーカ状の筆記具で「津井生山」と書かれており、生山古墳群の出土品の可能性が高い。

坏身は、口径10.0cm、高さ4.3cmで、口縁部が垂直に立ち上がって端部が面をなす。底部は幅広く丁寧な回転ヘラ削りを施しており、5世紀後半～末のTK23～47段階に位置付けられよう。坏蓋は、復元口径12.0cm、高さ4.2cmを測る。天井部と口縁部の境目の稜線はやや鈍いものの、明瞭な沈線で分けされており、天井部には回転ヘラ削りが施されている。口縁端部は段をなしている。坏身や短頸壺と異なって、外面には自然釉が生じており、破断面は赤褐色を呈している。焼成や胎土が他とは異なっているが、やはりTK23～47段階であろう。

短頸壺は、口径8.0cm、高さ7.8cm、胴部最大径12.2cmを測る。底部は平らで全体に扁平なプロポー



図4 長田山切割の推定位置

シオンを呈するが、胴部下半の広い範囲を回転ヘラケズリする。坏身と類似した色調、焼成を呈しており、一括品である保証はないが、上述の坏身・蓋と同段階に位置付けても良いと思われる。近隣の類別としては杉崎18号墳例（寺西1985）を挙げうる。

### 4. 鳥取市長田山切割出土

「長田山切割」と書かれた紙片が貼り付けられ、「W9」の注記が施された須恵器坏身がある。

口径11.8cm、高さ4.0cmで、口縁部が垂直気味に立ち上がるが、端部は丸く収める（図6-9, 図7-7）。底部はヘラ切りしたままで、なんの加工も施していない。口縁の立ち上がり部は、幅1cmほどの粘土紐を受部の内側に貼り付けて成形しているが、口縁部を全周せず、長さ1cmほどの不足が生じており、その部分を追加の粘土塊で補充している（図7-8）。TK209～TK217段階に位置付けられよう。

出土地名の「長田山切割」とはどこか。場所を特定する手がかりは少ないが、鳥取市上町の配水池が設置された丘陵を「長田山」と呼ぶようだ（鳥取市水道百年史編さん委員会2016）。水道施設が建設された後は、「水道山」とも呼ばれたが、そこに配水池への通路を作った時に2基の横穴墓を掘り出し、10数点の須恵器や鉄器が出土したという（鳥取市1943, pp.97-98）。「長田山切割」とは、この横穴墓の発見地点、すなわち上町所在横穴墓群（遺跡番号：旧鳥取市 2-0226, 図4）を指すと推測する。

上町配水池は鳥取市の上水道事業のごく初期に設置された施設で、工事は1912～1915（大正元～4）年の間のことと考えられる。出土年もその頃であろう。

### 5. 鳥取市荒神山横穴墓群出土

荒神山横穴墓群は、千代川の河口付近に位置する荒神山に作られた横穴墓群で、1891（明治24）年に



図5 荒神山横穴の位置

賀露港修築のための工事で多数の横穴墓を破壊した(遺跡番号:旧鳥取市 2-0001, 図5)。その際に出土した「陶質容器及刀剣片等」は「鳥取県師範学校及木山委員<sup>5)</sup>の許に保管し」た(梅原 1924, p.111)。

「明治〇年浜坂荒神山ニテ採〇」などと書かれた紙片が貼り付けられた須恵器は、現状で4点ある(図6-10~13, 図8-1~4)。紙片は破れて部分的にしか読めないが、これらが鳥取県師範学校で保管されたという荒神山横穴群出土品とみて大過あるまい。

ただし、鳥取県師範学校が作成した『郷土研究施設要覧』には、「鳥取市濱坂出土齋瓶土器」10点とあり、本来はさらに6点の須恵器が存在したはずである。現状では確証を得ないが、注記等の手がかりがなく出土地不明となっている須恵器の中に時期的によく似た資料や、保存状態が類似したものがあり、これらの中に荒神山横穴墓群出土資料が含まれている可能性がある(図6-14~21, 図8-5~8)。

10, 11 は坏蓋である。それぞれ径 13.0cm, 12.0cm, 高さ 4.5cm, 4.6cm を測る。10 は、天井部のおよそ 1/3 の範囲に回転ヘラケズリを施し、口縁部との境に凹線を巡らす点で比較的古い要素を残す。6 世紀後半の MT85 段階に位置付けられる可能性があり、従来の認識よりも 2 段階程度古く形成時期が遡る可能性を示す点で重要である。一方、11 は天井部を雑にヘラ切りするのみで削っていない。7 世紀前半の TK217 段階以降の可能性がある。12 は、高台付きの坏身で、類例は浜坂横穴墓(亀井 1964) や下味野 55 号墳(谷口 2004) などにある。7 世紀後半段階に位置付けられよう(岡田・八峠 2014)。13 は球形の胴部をもつ平瓶である。肩部の 2ヶ所に径 1cm ほどの竹管文を施す。また、底部には赤色顔料が付着する。

14 以降は出土地不明であるが、荒神山横穴墓出土品と類似した時期と考えられるもので、胎土や保存状態などがよく似たものを含む。行方不明の 6 点は、

この中に含まれている可能性がある。

14 は大型の広口壺で、胴部から肩部にかけて、5本の凹線と櫛描列点文を矢羽状に施す。底部は胴部以上の部分とは別造りになっており、内面に当て具痕を残す。TK43 段階前後に位置付けられようか。15~17 は坏蓋で、いずれも天井部をほとんど削らず、ヘラ状の工具で切り離した痕跡を残す。TK217 段階以降と考えられる。径は順に 9.0cm, 13.4cm, 14.5cm, 高さは 3.5cm, 4.0cm, 4.7cm である。15 には天井部に「Z10」の注記がある。18 は口径 11.6cm, 高さ 4.0cm の坏身で、底部の約 1/3 を回転ヘラケズリする。底部に「W10」の注記がある。19 は低脚の高坏で、口径 11.0cm, 高さ 6.2cm を測る。20 は横瓶で、胴部の一側面は平らに、反対の側面は砲弾状に丸く塞ぐと考えられる。口径 6.0cm, 高さ 19.5cm ある。肩部に径約 1cm の円盤状の粘土を前後の 2箇所に貼り付けている。図示した側の裏面には焼成台になったと考えられるものの口縁部が融着している(図8-8)。

### Ⅲ. 資料の歴史的意義

小稿で取り上げた資料は、出土遺跡の詳細が不明なものも多く、まとまりという点においても不揃いなものが多い。個々の資料について見ると、須恵器の製作技法上興味深い点が存在することは事実であるが、出土状態や共伴関係などが不明なために、単なるトピック以上の論点になることは期待できない。残念ながら、考古学的な意義はそれほど深くないと言わざるを得ない。

しかし、ほとんど未調査、あるいは広い範囲で未調査地点を残す古墳群については、将来的な調査に際して予備的な情報を提供するであろう。また、出土例の少ない器種については、比較対照資料としての意義は十分にある。

一方、古くに知られ、言及されながら、その後散逸したと思われた資料が本学に残されており、再び検討の機会を得ることができるという点は、別の意味で重要性をもつ。本学所蔵資料のうち、古墳時代以外の資料、例えば、弥生時代の石器や奈良時代の瓦などでは県中・西部出土資料も一定量存在するが、小稿で紹介した須恵器はほぼ東部地域出土のものに限られる。その理由の一つは、これらの須恵器が基本的に副葬品であり、埋葬施設の破壊等に伴って出土したという資料発見の経緯が関係していると考えられる。つまり、地表で意識的に採集される遺物とは異なって、一時的にある程度まとまった量の遺物

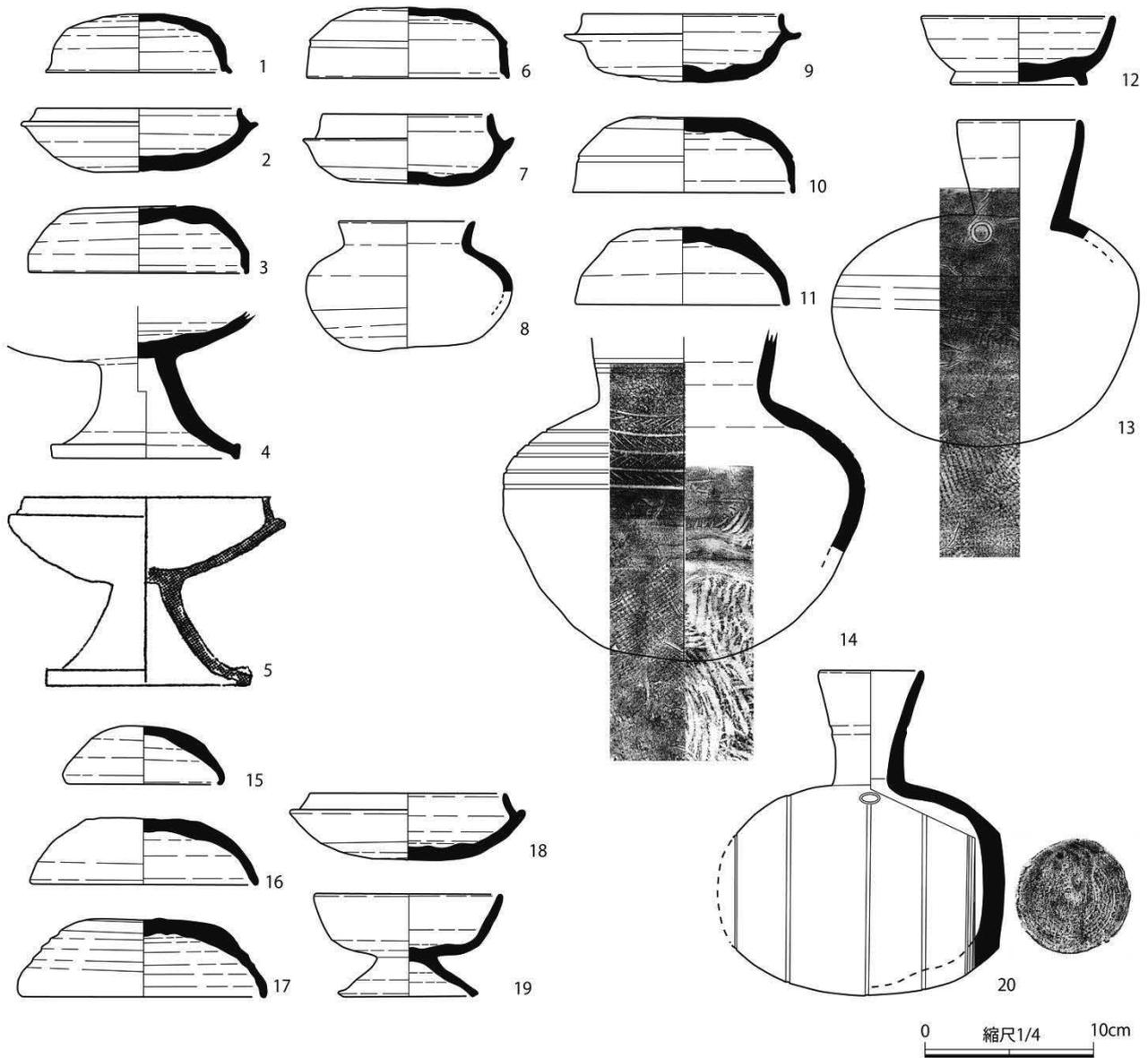


図6 須恵器実測図

が、意図せずに出土することになり、その処遇が検討されることになる。県東部の場合、そのような事態に対処しうる機関として師範学校が選ばれることが多かったことを反映しているのであろう<sup>6)</sup>。不時発見の歴史資料の避難施設として、その後の公開・活用施設として期待されたということでもあろう。実際、師範学校では郷土研究施設で展示されていたようであるし、新制の鳥取大学になっても、しばらくの間は付属図書館で保管、展示されていた。

しかし、遅くとも1980年代後半には、資料の数量や由来などが把握できなくなっていたようであり（平勢1988）、組織改編などによって専門の教員や経緯を知る職員らがいなくなるなどして、急速に死蔵

状態に陥っていったと考えられる。

地域の学校等に歴史的に蓄積されてきた考古資料は、戦後の一時期には地域史を知る手がかりとなる貴重な歴史的資源として認識されつつも、1970年代以降にはコレクションの維持に寄与してきた人的連環が途切れがちになり、廃棄や散逸といった事態を招くことが増えるという（市元2017）。考古資料に限らず、民俗資料や自然史資料なども同様な軌跡をたどる場合はあろうが、考古資料は一見して価値が分かるというものが少なく、洗浄、接合、分類など手間のかかる資料化作業を経て初めて歴史資料としての入口に立つ性質をもつ。容量もかさむため、厄介者扱いされることも多いであろう。

近年、学校等に集積されてきた学術資料（学校所在資料）について、文化経済学的観点から様々な価値を内包する財産として見直そうとする動きがある（村野 2015, 村野・和崎 2018 など）。そうした資料のうち、考古資料は、純粋に考古学的な価値以外に、地域の人々が地域の歴史をどのように扱おうとし、あるいは何を保存しようとしてきたかを物語る資料としての価値がある。また、地域の人々や学内の関係者が学校という施設にどのような役割を期待したか、あるいは、学校という場を使って何をなそうとしてきたのかを知る手がかりも提供するだろう。

#### IV. おわりに

小稿で紹介した須恵器は、本学が収蔵する考古資料のほんの一部にすぎない。量的に豊富で、一括性が高く、重要性のある遺物については、資料整理が済んだものから徐々に報告していく予定である。このような基礎的な資料化作業が地域史をより豊かに理解するための手がかりを提供することにつながるならば、これに過ぎる喜びはない。

#### 註

1)鳥取大学所蔵考古資料に関する目録としては、1936（昭和11）年に鳥取県師範学校が作成した『郷土研究施設要覧』が最も初期のものとしてあげられる。この要覧には「郷土教育資料目録」が記載され、「歴史之部 一、考古学的遺物類」の項に「石器、土器、埴輪、古瓦、金石文、古器物、武具、藩札貨幣」の8種類99件のリストが掲載されている。このリストのうち、「金石文」は拓本であり、「古器物、武具、藩札貨幣」は遺跡出土資料ではなく、資料名からすると、おそらく近世以降の伝世品の和鏡、刀剣類などである。遺跡出土資料としては61件の資料名があげられている（附表1）。

この目録の後、戦後の新制大学として学芸学部発足、キャンパス移転、教育学部への改組などを経て、新たな資料の追加とともに、混乱や散逸もあったようだ。教育学部が引き継いできた上記考古史料を含む郷土資料の一部は、1988年までの間に附属図書館の郷土史料室に保管されていたようで、その由来などを整理しなければわからない状態になっていたらしい。当時、教育学部に在職していた平勢隆朗氏（現・東京大学東洋文化研究所）が中心となって資料の分類・整理が行われた。その成果は『鳥取大学所蔵文化財整理簡報』としてまとめられたが、遺跡出土資料は14件のみである（附表2）。

2)鳥取大学学芸学部歴史学研究会『鳥取県東部に於ける古墳調査報告』第一輯は、刊行年を記さないが、内容から

して1956年から57年に作られた冊子と考えられ、下露谷1号墳・2号墳（鳥取市青谷町）、緑山1号墳・2号墳（鳥取市福部町）、鷹狩1号墳（鳥取市用瀬町）、郷原1号墳（鳥取市河原町）、向羅1号墳（鳥取市河原町）、立川遺跡（鳥取市）に関する情報を所載する。B5版、36ページの手書き、ガリ版刷りである。

3)本資料が出土年に寄贈されたこととすれば、註1)の『郷土研究施設要覧』のリストに記載されたはずであるが、実際にはない。寄贈年は1936年以降であろう。

4)このアルファベットと数字の組み合わせによる注記は、本学所蔵品の様々な資料につけられており、過去に何らかの整理作業が行われたことを示すが、残念ながら、それに関する資料は残されていない。

5)木山委員とは、県史蹟名勝天然記念物調査委員、『鳥取県郷土史』編さん委員などを務めた木山竹治氏のこと。

6)県中・西部出土資料の場合には、米子の山陰歴史館（徴古館）に収蔵される場合が多かったと考えられる。

#### 文献

市元 隼 2017「学校所在資料形成史」『考古学研究』第64巻第3号, pp.6-10

梅原末治 1924『因伯二国における古墳の調査』鳥取県史蹟勝地調査報告第2冊, 鳥取県

大村雅夫 1956「因幡・西浦山1号墳」『ひすい』29号, 佐々木古代文化研究室, pp.1-3

岡田裕之・八峠興 2014「鳥取における古代から中世前期の土器編年—須恵器と回転台土器を基に—」『鳥取県埋蔵文化財センター調査研究紀要』5, pp.1-16

亀井照人 1964「鳥取市浜坂横穴群発見について」『郷土と科学』第10巻第1号（『古代の窓』亀井照人遺稿追悼集に再録, pp.235-255）

谷口恭子 2004『下味野古墳群Ⅱ・下味野童子山遺跡』財団法人鳥取市文化財団

寺西健一 1985「鳥取県杉崎18号墳出土の須恵器」『古文化談叢』第15集, pp.43-52

鳥取県師範学校 1936『郷土研究施設要覧』

鳥取市 1943『鳥取市史』（1979年覆刻版）

鳥取市水道百年史編さん委員会 2016『鳥取市水道100年史』鳥取市水道局

東方仁史 2006「鳥取市国府町西浦山古墳の出土資料について」『鳥取県立博物館研究報告』第43号, pp.23-45

平勢隆郎 1988『鳥取大学所蔵文化財整理簡報』

村野正景 2015「学校所在資料の継承と活用への取り組み—京都における調査を題材として—」『遺跡学研究』第12号, pp.90-96

村野正景・和崎光太郎 2018「学校所在資料論の構築」『考古学研究』第64巻第4号, pp.1-4



図7 資料の現状 (1)



図8 資料の現状 (2)

附表1 鳥取縣師範学校郷土研究施設要覧所載の考古資料（1）

No.	名称	数量	備考（現在の遺跡名）
1	東伯郡西郷村大字上余戸出土石斧	1	（下余戸遺跡）
2	鳥取市吉成出土弥生式土器	3	（古市遺跡）
3	鳥取市浜坂出土齋瓶土器	10	（荒神山横穴か）
4	岩美郡宇部野村大字宮ノ下出土経筒ノ壺破片	2	（宇部神社経塚，1912年出土か）
5	岩美郡宇部野村大字国分寺出土弥生式土器片	1	
6	東伯郡東郷村出土弥生式土器破片	1	
7	東伯郡舎人村大字野方弥陀ヶ平出土齋瓶土器破片	1	（野方・弥陀ヶ平廃寺跡）
8	東伯郡南谷村大字安歩出土弥生式土器破壺	1	（大鳥居仙隠峯遺跡）
9	東伯郡以西村太千寺跡出土泥塔	7	（智積寺経塚出土品）
10	鳥取市大字浜坂出土埴輪円筒破片	1	
11	鳥取市大字浜坂出土埴輪破片	2	
12	東伯郡下北条村大字土下出土埴輪鹿脚部修補	1	昭和10年5月20日重要美術品ニ指定 （やすみ塚古墳）
13	東伯郡下北条村大字土下出土埴輪男子像残欠	1	右ニ同ジ（やすみ塚古墳）
14	鳥取市鳥取県師範学校校庭出土鬼瓦破片	2	
15	鳥取市鳥取県師範学校校庭出土唐草瓦	1	
16	鳥取市鳥取県師範学校校庭出土巴瓦	1	
17	鳥取市久松城跡出土巴瓦	2	（鳥取城跡）
18	鳥取市久松城天守閣跡出土巴瓦	2	（鳥取城跡）
19	鳥取市久松城跡下部出土巴瓦	1	（鳥取城跡）
20	鳥取市久松城跡出土鯪破片	1	（鳥取城跡）
21	鳥取市掛出町池田侯爵別邸跡出土唐草瓦	1	
22	岩美郡宇部野村大字中ノ郷大権寺出土瓦破片	4	（大権寺廃寺跡）
23	岩美郡宇部野村大字中ノ郷大権寺出土瓦破片	1	（大権寺廃寺跡）
24	岩美郡宇部野村大字国分寺出土瓦破片	1	（因幡国分寺跡）
25	岩美郡宇部野村大字岡益安徳天皇御陵参考地出土瓦破片	5	（岡益廃寺跡）
26	岩美郡宇部野村大字岡益安徳天皇御陵参考地出土瓦	1	（岡益廃寺跡）
27	岩美郡宇部野村大字棚鉢塔ノ壺出土古瓦破片	1	（等ヶ坪廃寺跡）
28	岩美郡岩井町弥勒寺跡出土平瓦破片	2	（岩井廃寺跡）
29	岩美郡岩井町弥勒寺跡出土巴瓦	1	（岩井廃寺跡）
30	八頭郡国中村大字百井慈住寺跡出土巴瓦	1	（土師百井廃寺跡）
31	八頭郡国中村大字百井慈住寺跡出土平瓦破片	5	（土師百井廃寺跡）
32	八頭郡国中村大字池田尼寺跡出土瓦破片	2	（天寺遺跡）
33	八頭郡国中村大字久能寺跡出土瓦破片	1	（万代寺遺跡）
34	気高郡大郷村大字提見出土経塚蓋破片	1	（現・鳥取市福井）
35	気高郡松帆村出土一字一石塔ノ石	6	（布勢山王山経塚）
36	気高郡勝谷村大字寺内出土平瓦破片	2	（寺内廃寺跡）
37	気高郡勝谷村大字寺内出土巴瓦	1	（寺内廃寺跡）
38	気高郡大正村大字菖蒲座光寺跡出土瓦破片	1	（菖蒲廃寺跡）
39	気高郡逢坂村大字上原出土平瓦破片	3	（上原遺跡）
40	気高郡逢坂村大字上原出土巴瓦	1	（上原遺跡）
41	気高郡鹿野町王舎城出土唐草瓦	1	（鹿野城跡）

附表1 鳥取縣師範学校郷土研究施設要覧所載の考古資料 (2)

No.	名称	数量	備考 (現在の遺跡名)
42	東伯郡倉吉町大字駄経寺出土古瓦破片	1	(大御堂廃寺跡)
43	東伯郡倉吉町大字駄経寺出土古瓦破片	2	(大御堂廃寺跡)
44	東伯郡高城村大日寺出土経瓦	2	(大日寺経塚)
45	東伯郡北谷村大字志津出土平瓦破片	1	(藤井谷廃寺跡)
46	東伯郡北谷村大字志津出土唐草瓦		(藤井谷廃寺跡, 数量記載なし)
47	東伯郡社村大字横田出土唐草瓦	1	(伯耆国庁跡か)
48	東伯郡社村大字国分寺小字法華寺出土唐草瓦	1	(伯耆国分寺跡)
49	東伯郡社村大字国分寺出土巴瓦	1	(伯耆国分寺跡)
50	東伯郡上小鴨村大字石塚出土平瓦破片	2	(石塚廃寺跡)
51	東伯郡上小鴨村大字石塚出土唐草瓦	1	(石塚廃寺跡)
52	東伯郡伊勢崎村大字槻ノ下出土平瓦破片	3	(斎尾廃寺跡)
53	東伯郡伊勢崎村大字槻ノ下出土巴瓦	1	(斎尾廃寺跡)
54	東伯郡伊勢村大字槻ノ下出土唐草瓦	1	(斎尾廃寺跡)
55	東伯郡舍人村大字野方弥陀ヶ平出土瓦破片	1	(野方・弥陀ヶ平廃寺跡)
56	東伯郡舍人村大字野方塔ノ辻出土瓦破片	1	(野方・弥陀ヶ平廃寺跡)
57	東伯郡西郷村大字小原出土巴瓦破片	1	(大原廃寺跡か, 大原の誤記か)
58	西伯郡宇田川村大字福岡向根出土古瓦破片	1	(上淀廃寺跡)
59	西伯郡幡郷村大字大殿出土唐草瓦	1	(大寺廃寺跡)
60	西伯郡幡郷村大字坂長出土巴瓦	1	(坂中廃寺跡)
61	西伯郡幡郷村大字大殿出土平瓦破片	1	(大寺廃寺跡)

附表2 鳥取大学所蔵文化財整理簡報所載の考古資料

No.	名称	数量	備考
1	やすみ塚出土埴輪鹿	1	鳥取県立博物館に寄託中
2	やすみ塚出土人物埴輪	1	鳥取県立博物館に寄託中
3	濃山17号墳出土把手付脚付盃	1	湖山地区キャンパス造成時出土
4	因幡国分寺跡出土の軒丸瓦	1	
5	上淀廃寺跡の軒丸瓦	1	
6	岡益廃寺出土古代瓦	一式	
7	縁山2号墳出土遺物	1	1956年調査, 鉄刀
8	御建山古墳出土埴輪	一式	1956年調査
9	郷原1号墳出土遺物	一式	1955年調査, 高坏, 鉄刀
10	向羅1号墳出土遺物	一式	1955年調査, 須恵器平瓶, 高坏, 坏, 鉄鏃, 鉄刀, 刀子等
11	三谷出土骨壺	2	身と蓋
12	中世墓出土遺物	一式	大熊段遺跡E・G区, 1984・1985年調査
13	岩吉遺跡出土遺物	一式	1976年調査
14	青島遺跡出土縄文土器	一式	